

## 宝慶寺（ほうきょうじ）：宝慶寺の概要

宝慶寺は、1278年に中国僧であり、日本の曹洞宗の開祖である道元禅師（1200–1253）のもとで修行した寂円（1207–1299）が開山した寺である。宝慶寺は曹洞宗の「第二道場」（dai nidōjō）として、また永平寺の第一番札所として知られている。参詣者は坐禅に参加したり、最長 10 日間、宝慶寺で僧侶と一緒に修行することもできる。

道元禅師と寂円はどちらも、中国の太白山にあった天童景德禅寺の如浄禅師（1163～1228年）について学び修行した。1228年如浄禅師の没後、寂円は道元禅師に従って来日し、永平寺で学び修行をした。寂円は最終的に道元禅師から印可を受け、1261年まで永平寺に滞在した。寂円はその後、大野市の南にある銀杏峰山（ぎんなんぼう）のふもとにある大きな岩の上で一人で坐禅を始めた。地元の領主の伊志良氏（いじらし）が狩猟中に寂円に出会い、その熱心さに感銘を受け、寂円が寺を建設するための資金を提供した。寂円は、この寺院の名前を道元禅師とともに如浄禅師に師事した宝慶時代（1225～1227年）にちなんで宝慶寺と名付けた。

ある日、寂円が瞑想に没頭していた時、突然犬と牛が彼の前に現れた。それ以来 2 匹の動物はいつも托鉢（僧侶が修行で施しを求める行為）に同行した。寂円が亡くなると、動物たちもすぐに死んでしまった。犬と牛に捧げられた小さなお堂が宝慶寺の境内にある寂円の墓の近くに立っている。

宝慶寺と永平寺は長い間密接な関係を築いてきた。寂円の弟子の義雲（1253–1333）は宝慶寺第二代住職を務め、1314年に永平寺の第五代住職に就いた。1297年の火災で永平寺の大部分の建物が焼失してしまった後、義雲は大規模な再建に乗り出した。永平寺の伽藍を再建するには膨大な木材が必要であった。そのため伐採されてしまった多くの木々を補うために、義雲は杉の植林を行った。その当時から残っている木々を「第五世住持杉」（五代杉）と呼んでいる。

宝慶寺での僧侶の生活は、曹洞宗の僧侶の典型的な生活とは少し異なる。寂円の足跡をたどって、僧侶たちは毎月 4～5 回、山を下って大野市までの 12 キロの道のりを托鉢に出かける。永平寺の僧侶たちは毎朝 3:30（夏）または 4:30（冬）の起床であるが、宝慶寺では、厳しい托鉢の 1 日の後に十分な睡眠を必要とする僧侶のために、特別に例外がもうけられている。